

ルカ・カッポンチェッリ 提出 学位申請論文

「日本近代詩の発展過程の研究

—与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心に—」 審査要旨

論文の内容と要旨

本論文は、日本近代詩歌の発展をもたらした与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心にして文学表現における近代的自我の生成が、近代国家形成に関わる社会状況と諸制度、特に性差、地域、経済環境などを中心にその影響関係を分析し、日本近代の韻文表現に現れた自我のありようの展開を考察しようとするものである。近代の絶対的な観念として形成される国民国家、政治思想、国民アイデンティティーは、社会体制の基本的な枠となったものである。これらの観念は、近代における〈身体〉への認識論と思考様式にも大きな影響を及ぼし、政治と社会体制の根底を流れていた。そして、当時の文学における自己表現はこの背景に立ち向かわざるを得なかったのである。そこで本論はまず最初に、明治以降の和歌文学を近代短歌として定着させつつ、浪漫主義文学思想を推し進めることによって個人意識を確立していった『明星』派の運動に注目した。なかでも短歌表現において近代女性としての自我を表し、社会的に大きな影響力を持った与謝野晶子の短歌表現における〈身体〉性を分析する。次に、同じく浪漫主義的文学思想を背景にしながらも経済状況の格差を受け止め、自我と社会との葛藤を短歌表現として歌い上げ、社会批評の領域へと進んでいこ

うとした石川啄木を分析する、そして大正期から昭和へかけて、脱現実への指向性において大胆な自己表現を口語自由詩として完成させた萩原朔太郎を取り上げて考察する。こうして本論は、およそ明治30年代から昭和10年代までの日本近代国家、社会制度と対照させながら近代文学表現の中でも特に個人性を突出させる韻文表現に注目し、自我意識の萌芽となった〈身体〉の言語化のありようをこの三者において分析し、セクシャリティ、エロティシズムを喚起しつつ自我表象を生成させていった過程を浮き彫りにしようとするものである。

第1章は与謝野晶子『みだれ髪』を中心に、自我表現とエロティシズムの統合に焦点を当て、それが聖と俗の二元性によって表出されるという問題を考察した。このような二元性はもともと西欧の人道主義に端を発するものであるが、デカルトの心身二元論に展開される近代の思考様式の原型とも言える。晶子の作詩法において見出される「聖」と「俗」という範疇は女性の身体の表象と結びついているが、それは前近代的な日本社会から継続していた「良妻賢母」型の理念によって女性の身体を制御しようとする社会体制と通念的なジェンダー構成に反抗的な精神を醸成することとなった。しかし、この段階では『みだれ髪』の短歌表現はまだ神秘的、形而上的な指向性において女性像が見出されており、それが近代的な内面世界として外部の社会現実と激しく切り結ぶようなことはなかったのである。このことは晶子の自由詩『君死にたまふこと勿れ』の発表とこの詩をめぐる賛否両論の批評という社会現象を起こすに至って変化していったと本論は論述する。つまり、晶子の表現に喚起される時代批評精神と、平塚雷鳥

『青鞜』への接近から顕著になっていく女権拡張論という二つの軸が重なることで、晶子の〈身体〉表現は政治社会体制が構築する「良妻賢母」という女性ジェンダーを解体し、女性身体の生命力が国家以前に先在する地球的イメージに拡大しようと目論む理想主義的、浪漫主義的な精神が確認できる。しかし、日露戦争後の晶子において反戦主義から戦争肯定へ、日本帝国主義との結合へと転向したという批判もあるが、このことは東京新詩社『明星』が体現した浪漫主義思想と女権拡張論の追求が相俟ってさらなる女性解放、男女同権論への指向性においてなされたものであるという結論を導いている。

第2章は、石川啄木に焦点を当て、初期の浪漫主義的創作における与謝野晶子、鉄幹の影響を確認した上で、高山樗牛の天才主義という理念が年若い啄木の自我認識に多大な影響を与えたことを明確にした。たとえば新体詩集の『あこがれ』の根底にある天地開闢による天世と現世という二元性という理解のしかたに高山樗牛の思想が明らかに見て取れる。この時点ではまだ理想主義的、形而上的な観念でしかなかったが、詩人としての挫折と自然主義思想の受容から〈今〉の〈現実〉へ視点をおいた新たな自己認識の方法を発見する。それが歌集『一握の砂』に結実するが、その時期に書かれた『ローマ字日記』にはエロスの対象としての女性の肉体的交渉をローマ字という外部の記号で表現することによって自己を観察対象として外化する契機を得たと考えられる。この対象化された自己像の表現において逆に内面化する自己を形成していった過程が見出されると論じる。また、啄木短歌における自己の〈身体〉への眼差しはそのまま〈今〉の〈現実〉の中

に置かれた自己像の確認へと促し、そこから自己をとりまく社会現実への批評的認識が生成される点を分析し、『時代閉塞の現状』を表す社会批評家としての啄木像の成立を考察する。

第3章は、萩原朔太郎を考察するが、朔太郎においてもその出発には『明星』派の短歌表現が大きな影響をもたらし、それは『ソライロノハナ』に顕著に表れていることを確認、さらに森鷗外、北原白秋らの作歌も受容しつつ、徐々に口語自由詩への展開したことを跡づけている。とくに『浄罪詩編ノート』と『月に吠える』の中心にある実存的な苦悩を深める表現方法の探究は自虐的な姿勢と現実への不適応という精神のありようが、宗教的イメージを伴った、罪、疾患、エロス、自殺願望等の観念として特徴となっていく。こうして特異な内面イメージが口語と文語との交錯状態を経ながら形成され、朔太郎詩の自我のリズムを展開することになると分析し、生命と破壊の二つのベクトルに引き裂かれる特徴的なイメージを浮き彫りにする。そして、朔太郎詩における自我とは、外部世界に対する感傷的で受動的な精神であり、それは政治的社会的な制度が要求する健全かつ有用な〈身体〉と〈精神〉からの疎外をもたらし、それへの抵抗としての表現指向が生成されていったと結ぶ。

以上のように三者の韻文表現の成立と展開過程についてそれぞれの文学表現への動機から分析しつつ、〈身体〉の表現に注目して考察していくことによって、三者における自我の発見がなんらかの疎外状況に基づくことは明らかになるが、しかし、それ以上に三者が自己発見の契機として選択した表現手段が短歌、詩という本来的に主体性を要

請する言語形式によって対象化され、記述した主体にとっては内面化されていく契機となっていたと論じていく。晶子の女権拡張論、啄木の社会批評、朔太郎の反国家の姿勢は、どれも主体を抑圧する国家という観念を乗り越えようとする言説へと促していくものだったと考察するものである。

論文審査の結果の要旨

ルカ・カッポンチェッリ氏の『日本近代詩の発展過程の研究—与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心に—』は、日本近代文学史の詩歌の領域において重要な意味を持つ与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎をとりあげた意欲的な論文である。その1人1人が質量ともに価値ある内容を持っており、その1人を論ずることでも通常手一杯なところ、3人を対象とし、国民・国家を基軸に置くことで見えてくる近代の自我と抒情と理性との関係に着目している。特に〈身体〉についての表現分析を共通項として、3人の韻文表現とそこから立ち上がる意識のあり方、個性を丁寧に論じている。

第1章、与謝野晶子の『みだれ髪』については、『明星』の浪漫主義の中心となった、晶子の自己表現とエロティシズムの統合、聖と俗の二元性の中にある近代性をとらえ、『文学界』の北村透谷の評論、島崎藤村の『若菜集』をも踏まえている。また反戦詩とも読まれる「君死にたまふこと勿れ」については、時代批評の精神と女性として

の自我意識とのつながり、人道主義からの視座も入れて、自由に個人の感情を歌う近代的自我の台頭とみなしている。また、ともすれば晶子の反戦主義から戦争肯定への転向と見なされやすい「紅顔の死」や「日本国民 朝の歌」などから、女権拡張を推進する活動と帝国主義への傾斜を示す指向性が表裏一体となった意識が浮上する様態をも論究しておりバランスの取れた考察となっている。

第2章、石川啄木については、〈内面の発見から社会批評へ〉という観点から、『一握の砂』『悲しき玩具』においては、身体表現において心理を具体化する技巧を読み取り、「ローマ字日記」においてはエロスの対象としての女性の身体の観察をローマ字で表現することにより他者の身体への直視が、性の内面化という自己確認に必要な過程であったこと、ととらえている。さらに評論「時代閉塞の現状」における一純粹自然主義の最後および明日の考察—から自然主義と国家強権に対する批判的な精神に、自己及び社会の改善へという進化論的な見解があり、現実直視の〈理性〉を軸とした社会批評の指向性を指摘しており、そこに石川啄木の表現者としての特質を明確にしている。つまり、近代短歌を代表する歌人としての業績確認に止まることなく、夭逝した時点を完成としてそこから振り返るかたちでの啄木像を一步進めて、「時代閉塞の現状」の指し示す言葉のあり得べき姿を示唆する点で説得力に富む考察と言える。

第3章、萩原朔太郎については〈センチメンタリズムの流動性から近代日本の批評へ〉という観点から、『ソライロノハナ』収録の短歌、後の「愛憐詩篇」に収録されることになる初期詩、そして第1詩

集『月に吠える』における身体表現を論じ、特に『浄罪詩篇』に生命衝動と破壊的衝動の緊張関係を読み取っている。さらに『詩の原理』の二元論をふまえ、H・ベルクソンの哲学における意識の考え方の受容に注目し、フロイト学説をも参照しつつ分析を行い、朔太郎晩年の思考のあり方を『日本への回帰』における同時代への批評の構造を解明することによって論究している。

以上、多岐にわたる内容となっているが、一貫しているのは近代の政治体制、社会体制に対する文学的な姿勢の検証であり、作品に現われる自我の形成過程への探究である。

ただし本論文の課題点として次のことを指摘しておきたい、序章における本論文の理論的な説明、特に〈身体〉概念をどのような意味で用いるのか、さらに厳密な定義がなされるべきであること。ローマ字表記の機能分析をさらに掘り下げて欲しいこと。日本の近代的自我について、たとえば北村透谷と山路愛山に関わってなされた小田切秀雄と平岡敏夫の近代的自我史観の論争などの研究史を視野に入れて欲しいこと。これらを踏まえて自我のありよう、国民・国家との関係がどうとらえられてきたのか、さらに精密な論考として展開されることを期待したい。ともあれ、日本近代詩歌の表現における自我と外部の葛藤を、〈身体〉の表現史といった見取り図を描こうという点で挑戦的かつすぐれて問題提起的な論考として評価できるものである。よって、本論文の提出者であるルカ・カッポンチェッリ氏は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成29年2月15日

主査 國學院大學教授 石川則夫 ㊟

副査 國學院大學准教授 井上明芳 ㊟

副査 都留文科大学副学長 阿毛久芳 ㊟

ルカ・カッポンチェッリ 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成28年12月26日

学力確認担当者

主査 國學院大學教授 石川 則 夫 ⑩

副査 國學院大學准教授 井上 明 芳 ⑩

副査 都留文科大学副学長 阿毛 久 芳 ⑩